

Persona)

Effects



No. 8

85.12

Persona)

Effects



で放火され、燃え上がる国鉄浅草橋駅。29日午前7時40分、毎日新聞ヘリコプターから29日新聞折込広告より

大腸の蠕動運動



肛門部



便秘



タカラ
ぶくもと



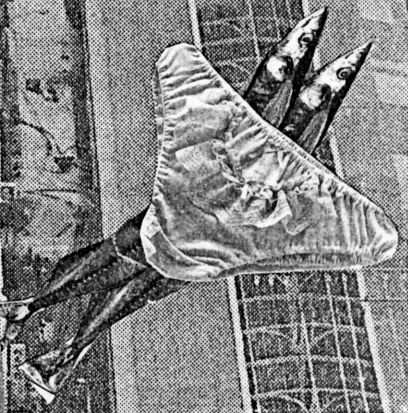
排泄



その毒素



悪玉大腸菌



FRIDAY
9/23 150m



あなたにとって今年(1985年)はどんな年でした?
というのをやろうと思っていたら これは霜田誠二氏
が大かかりに企画してしまった。(12/10×切は間近)
それでもこの個人的文通誌はただ読まれている
だけではつまらない。何人かの人からはいろんな形
で返事ももらったけれど、たまには全員がそろった
ばらばらの声を聞きたい。それで一応霜田氏が
除外したベスト10形式で同封のハカキに書いて
ほしいと思っています。ベストでもいいしワーストでもいい
し、気になったものを、社会的事件でも個人的事件
でも、一緒にしても、項目別にもけても、10にこだわ
らなくて、5でも3でも1でも、たたられつずりだけ
でもいいけど、できればコメントをそえてほしい。
またその形式では書けない、他のことを書きたいと
いう人は自由に書いていたたいて結構です。それ
からさしつかえなければ末尾に名前等書いておいて
下さい。×切は1986年1月1日です。これではよろしく

また、年末はありきたりだからP.E.発行1周年の
時にでもすればという意見もあったのですが俗っ
ぽく年末に今年のベスト10をやりたいし、才一僕は
子供の頃から世界の高い山、長い川、強いプロレスラー
好きな俳優などのベスト10をつくらせては楽しんで
いたもので毎月やってもいいくらい好きなのです。

それで1周年には音版も進行しているようにし、
P.S.E. ライフでもやろうかと考えています。

☆11月14日、法大で「風の旅団」テント公演“^{ロイヤル}王國と幕族”を観た。初めは懐かしく、やがて少し昂揚し、後半の幾分無理のあるいくつかのクワイマックスを過ぎたあたりからややきれいな気分になり、最後には空虚さが残った。

☆たしか、「曲馬館」時代からの役者は演出も手懸けている桜井大造のみだったと記憶するが、芝居のモチーフも、全くと言っていいほど昔と変わらず、今なお「大逆」の夢、「草の根の人民が天皇制を撃つ」という物語への夢を持ち続けている（もともと彼らの場合、「人民」は「異形の者ども」に、「天皇制」は「ヒロヒトその人」に置き換えられているが）。しかし、芝居は昔と変わらなくとも、芝居を取り囲む「情況」は変わった。そのため、善し悪しは別として彼らの芝居は自然にアナクロの様相を呈することになってしまった。

☆かつての政治的テーマを用いたアジタイションや冗談が出てくる場面にはごく一部の観客から喝采が送られた。彼らはおそらく往年の熱心なアンダグラウンド演劇ファンの残党（あるいは彼らの遅れてきた弟・妹たち）だろう。しかし、実際にもっとも受けていたのは、ウルトラママンと怪獣の乱闘を揶揄した、物語の中ではさして重要でない場面（僕には最も「浮いて」見えた場面）だったのである。これにはウルトラママン役を客演した役者がどうやら客の身内だったらしいという事情もあるけれど、はかに受けていたのもほとんどがテレレビネタに基づく他愛もないすぐぐりの場面であったことからみて、観客が様変わりしていることは確かと言えそうだ。

☆曲馬館時代にはほとんど無かった、という意味で言えば、軽いテレレビネタの使用は新しい試みではある。しかし、劇全体の流れで見ると、そこには「無理に冗談を言っているかのような」ある種の絹々しさが感じられる。その「無理」は、さきに述べた観客の様変わりではなく、この劇団の柱である桜井とはかの大半の役者たちとの間の世代的ギャップに起因しているような気がする。観客たちと同様、当然役者たちの世代も替わっている。桜井と共有すべき政治的ルサンチマンを、若い役者たちは体験的に持たない。そこで彼らは、「都市の底辺」（山谷に代表される。）を巡る旅と芝居そのものを通じてルサンチマンを疎付けて「学習」するほかはない。彼らの台詞が桜井とは対照的に「情念を表現しきれずに」上滑りに響く背景には、こうした事情があると思われる。本当はテレレビのギャグの借用など桜井の好むところではないだろう。だが、曲馬館以来墨守しているルサンチマンを表現するためには、共演者たちとの世代的軋轢の潤滑剤として、それらを使わざるを得なかったのではないだろうか。

☆時代の流れに抗いながらポリシーを明示し続ける彼らのような劇団は貴重だ。だが、最底辺から最上層部を撃つという一昔前の方法には、もう先がないことは確かだと思ふ。そもそも二項対立という問題の立て方が不毛なのではないか。誰かが言っ

ていたように、今や制度に対する“アンチ”は制度を補完するものでしかないのではないか。反一権力という、もうひとつの権力。彼らの構想する革命に、僕は与しない。

☆それにしても困ったことは、彼らの方法が物語の読み方の多様性を奪い、あらゆる要素をひとつのイデオロギーに収斂させるように機能することだ。これでは、芝居はイデオロギーを説明する道具でしかなくなってしまふ。ひとりひとりの役者の魅力がいまひとつ見えてこなかった原因もここにあると思う。ここでは役者もまた道具のひとつでしかない。

☆しかし、何か決定的な契機でも導入されない限りは、「風の旅団」は「芸術と革命」の運動の生きた化石として、このまま少数のファンとともに延命していくことだろう。彼らはおそらくそういう道を選び探ってしまつた人々である。

☆そうだとしたら、僕が期待することは、彼らのイデオロギーの隙間から（意図に反して）異物がはみ出す瞬間、そして彼らが有終の美を飾る瞬間を目撃すること、もはやこれしかないことになる。

★な一んて言ったら「反動」と目されるのかな。「敵の敵は味方、味方の敵は敵、敵の存在が味方を作る」ってか？ ☆はしよります。★最近見物録。11月4日「日本の24時間」展。同日に日本の各地でカメラマンたちが一斉に「日本」を撮る、というアイデアはまず○。しかし、作品群の視点は凡庸だ。それに、キレイすぎる。「日本の24時間」を撮る（主に外国の）写真家たち「のドキュメント・ヴィデオも同時進行で作られたりして、抜け目ない商売だな。11月9日“公民館運動・第3回”。依然として版一コンサートならず、不満。11月22日“ハンズ大賞作品展”。木、紙、金属、ガラス、プラスチック等素材も様々、幼児から老人まで参加者も様々の手作り作品が約200点。世間には器用な人たちがこんなになくさんいるのか、と驚嘆。プロのアーティストも「畏怖」を感じている由。素直に楽しめる反面、パラノイアの楽園に迷い込んでみたいないな無気味さもあり。

☆最近読書録。①『若者文化の記号論』中野収／相変わらず記号と戯れている。この人の記号論の良い点は便利なこと、悪い点は結局常識論に帰着してしまうこと。②『現代思想のキ・ワード』今村仁司／真面目な思想家である。少しだけ勇気づけられる。③『ことばを失った若者たち』桜井哲夫／①、②と併読すると、大変な時代だな、とヒシヒシと感じることができ。前2冊に較べるとこの本には著者自身が認めるように幾分'60年代へのノスタルジーが漂ってると、これにいちいち願けてしまふ私もやはりアナクロなのかしら。④『ハナ肇とクレージーキャッツ物語』山下勝利／僕が好きなのはあくまで彼らの虚像であって、実像には余り興味がない、と言いつつもいつい買ってしまうファン力の弱さ。あつという間に読めてしまふ物足りないが、クレージーの體の部分でも言うべき「クレージーになりそこなった男」石田正弘のこともちゃんと書いてあるのは○。不運を絵にかいたような人だったのね。⑤『見晴らし丘にて』近藤ようこ／この人は本当に上手いなあ。「怖い」景画を描ける人です。⑥『シュンボンオン』倉橋由美子／『夢の浮城』『城の中の城』に続く作品。三部作完結編というわけ

じゃないけど、おそろくこれで終わりだろう。近未来が舞台だがSFではない。小説の形を借りて作者自身の趣味を語っているだけという感じがする。彼女の作品は全部読んで、やっぱり初期のツッパツパーってやるやつが好き。なんで皆年食うと古曲に帰るんだろうねー。⑩『不良少年の映画史』筒井康隆ノとにかく餓鬼の頃から筒井が好きで、学生時代は筒井の小説ばかり読んでいた。たしか初めに読んだのは『SFマガジン』に載った「マグロマサル」だから、小学四年生だったはずである。このときは同級生の兄貴から借りて読んだ。当時は自分の好きな本を自分のカネで買უნなんで買込はできなかったから、家にある本を読んだり、友人やその兄弟から借りて読んだり、本屋で立ち読みしたりというのが普通だったと思う。「タメになる本」とか、若干のマンガ雑誌（『少年』『少年』『少年』『少年』『少年』『少年』あたり）はときどき親に買ってもらったけど。小遣いは主に駄菓子代（ペビラーメンなど）や遊び道具（合成樹脂製の手裏剣、28弾など）代に消えていたが、それを我慢して貯めたカネでたまには『SFマガジン』だの『元推理文庫』を買って読んだ。筒井の作品でいえば『ベトナム脱光公社』とか「馬の首風雲録」は『マガジン』で読んだ。でも、大多数の筒井作品は早川SFシリーズのポケット版とか書き下ろし版を、本屋で立ち読みした。2、3時間は粘ったな。……中、高校生になると幾分小遣いも上がったから、自分で単行本も買えるようになってきた。で、筒井作品を集めたことも手伝って、筒井熱に拍車がかかった。特に高校の頃には世間でもちょっとした筒井ブームが起こり、新作の単行本化と旧作の文庫本化が相次いで（これは今日にまで至っているが）、なかなかカネが追いつかなくて困るという状況になったが、結局この時期に筒井作品の単行本版と文庫本版はほぼ全部手許に揃い、残すところは童話ぐらいになってしまった。……と、また話が長くなってしまった。以下省略。話を元に戻すと、この本は「全業」に未収録だったんで買った。中身は観ていない（そして今後観る機会もありそうにない）映画のことばかりでチェッ、口惜しいじゃん。★あとね、サ店で『週刊朝日』読んだら、「男たちの居心地空間」っていう、なんつーか、“お宅訪問”のページがあって、N.Y（だっけ？）のジョン・ケーザさんのマンションが紹介されました。仕切りを取っ払った広いワン・ルーム、壁に懸けられたキノコの図版、最小限の家具、楽器はひとつもなく、デスクの上にはパソコンが1台。まったく絵にかいたようなお部屋で、買ってしまいました。コンピュータで易をやるそうなので、相変わらずですわね。☆《Personal Sound Effects No.2》には、現在9名から9作品が寄せられています。参加者数・作品数とも前回並みですが、延べ収録時間は前回を下回っています。もう少し待ってみます。参加作品がこれ以上増えなかつたら、30分テープになります。なお、現在までの参加メンバーは、アミン、倉本高弘、大野由美子・今井隆、藤本和男、？（匿名希望）、福本健修、乙部聖子、河台渉、以上です。《PSE》は毎月25日締切り、年中受け付けてますんで、今後ともヨロシク。問合せ先は（また書いといたほうがいいのかなあ）〒168杉並区高円寺北3-22-8 確氷WY2F 藤本和男 ☎03(310)5842 です。★85.11.27

11月珍しく勤怠回る。9日調布が3回 公民館運動。
久し振りに自分も参加して緊張。全体としてはいつもながら
という所が、終わったあとの飲む方が面白いなんていけない
とかかしら。10日北浦和美術館で「忘れられた人々」を
見る。2度目だが、改めて夢の場面が身体がふるえ
るように恐ろしい。残酷なまでに冷徹な目でアニメ
エロはみつめている。15、16日「風の旅団」法大公演。
今回 藤本氏より旅団の問題点指摘原稿あり。
なるほど。たしかに根強い一部のファンは異常なノリは
取っついていてある。そして一つのイデオロギーに到達する
ために個々の存在(物語)が散漫になってしまう点はある。
だがそれでも私は旅団が好きだ。ウフな私としては
まず火を見ると単純に興奮してしまう。水遊びをしている
とうれしくなる。グジャレも好きである。閑静はすしのように
芝居と現実が混同するからくり。例えば以前も書いた
舞台の上のテントをのぞくとそこに自分たちかいて、すると自分
たちも見られているとか、静かにしてはいけない場面で
効果音が大きいと「シーツ。」という小さくさせるとか、「光を
おと光を」と照明をふやしていくPfxなど。洗練されてい
ない役者たちの動きも気持ちいい。猥雑雑な異形のもの
のうごめき。だってさ、NHK TV でやっていた「青い鳥」の
芝居なんて物足りなくてしょうがない。20分ほどでスポーツ
ニュースに変えてしまった。つまり私は政治、思想、産見念など
以前に見世物を望んでいるのです。血湧き肉踊るとい
やつです。などと感情たけの話をしてしまっただけ。とにかく
藤本氏の意見は考慮するべきところではある。そして見
続けていこう。19日池袋文芸堂「炎のごとく」
「日本伝花伝」加藤泰は最後の日本映画の華という
感じ。特に後者は役者も演出もなまめかく美しい。

感情が先走ってしまうので評する言葉はもどかしい。
20日江戸川「旅団」打ち上げ宴会に固く参加。
役者たちが舞台と感じが違うのにおどろく。園田
佐登志氏も今回 不満とのこと。いもん! 25日国分寺
本多公民館3分向パリアス。3分向という長さ(短さ)
のせいか退屈も短くてすんだけれど。面白かったのは
「あわ男」若永洋平氏。カリバーがこれに似たことはや
っていたと思うが、こんなにはまりとした平面映像の中の
作者と立体実像である作者の会話パフォーマンスは
誰もやっていなかったのでは。作者が現場にいなかった
ようで(屋の部)試みも半減。実際のやりとりを見た
かった。このあと鶴川和光大コンサート。ルパルク(可愛い)
霜田誠二(漫才風面白。詩が込められる)粉川哲夫(パフ
するとは思ってなかったのでびっくりするやら取っついてやら)
A-MUSIC(カノク。充実)など見聞。26日三鷹エゴン
シール(魅力的女優)計のルーレット(このゲーム一度して
みる?)この次第(最初のSF映画と最後のカメラを銃
がかり構えたアクションがよい)昨日の疲れが時々寝て
いてはまりしたことはよくわからなかった。3本はきついな。

本は借りたばかりで「諸子でできなかったものが多いが、
相谷行人「思考のパラドックス」浅田彰「逃走論」
学問モノは漢字が多すぎて愚かな私としては
宇能鴻一郎風文体で書いてもらいたいと思っていたら
上杉清文「無責任な思想」はそんなこともやっていた。
小林信彦「巻語訓練」でめまいの写りような日本社会
を教えぬ 菅井康隆「狂気の沙汰も金次第」で正しい
クソとタンを食べ方を覚え 村上春樹「回転木馬のデ
ッドヒート」で20日間吐き続ける技術と学が蓮實重彦
「映画はいかにして死ぬか」で誰も見ていないところを
見て喜ぶ快樂を味わい 池内紀「闇に此の炬火ありて」...

◎旅団についてもう少し。

散漫といったが、その膨大な物語を見ている個々の問題としていくつでもとり出し考えていけば良いのでは。観念的に見ようと表層的に見ようとどんな見方であれいくつでも話を進めていくとかができるのが他の劇団には(多分)ない良さだと思う。遊眠社、300、そして状況でさえメジャー商品としてTVで見れるのだから、突出したもの、その毒たるものなど何もありません。あつたとしても消えてしまっている。旅団にはいつまでもその濃い血をしたらせてほしい。

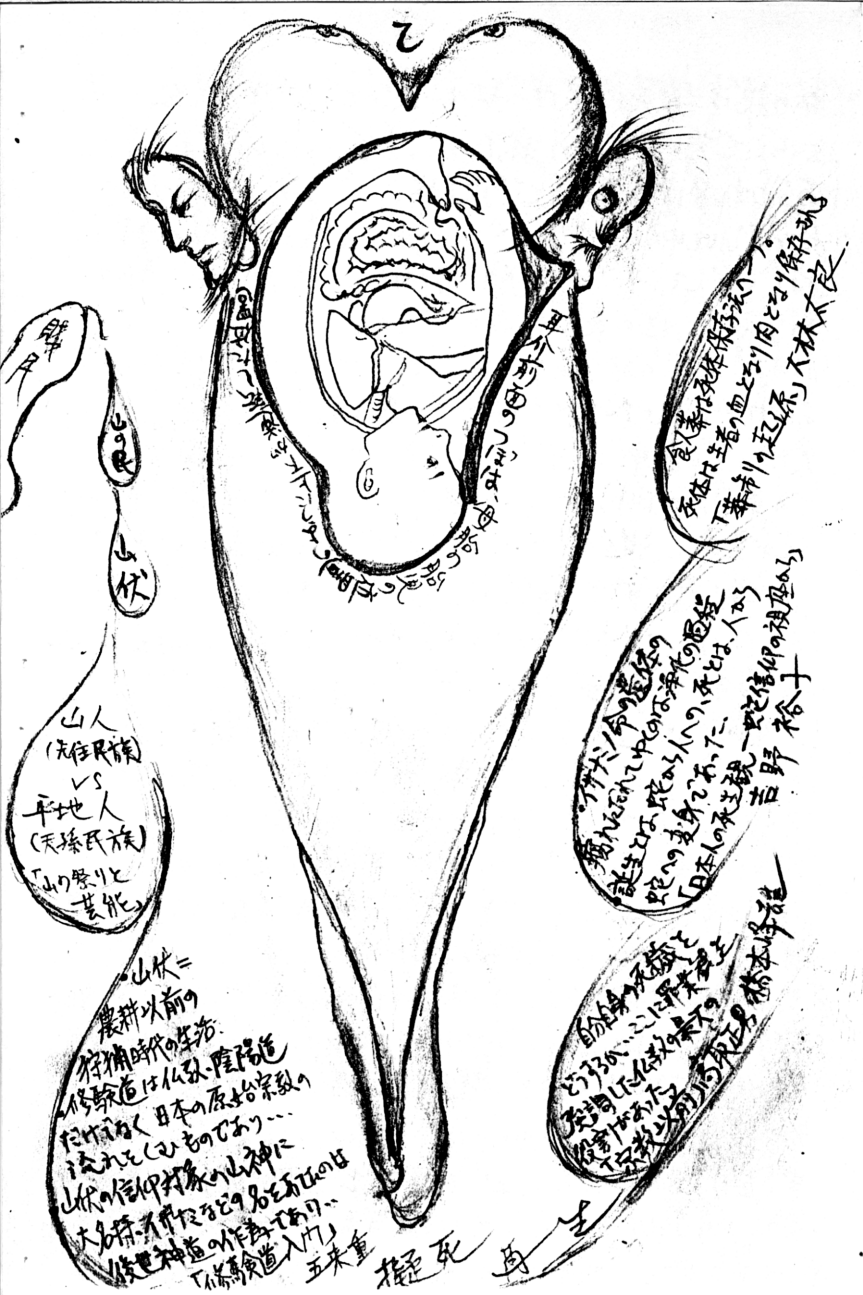
◎カレンダーを見るのが好きだ。この頃にはどうしているのかなとか。ただ「はくせん」と数字の順列をみているだけでも気持ちいい(変態)。おすす今年も終わってしまう。悲しいようにけど、すでに来年のカレンダーの数字を見ることかできる。だから淋しくはない。

◎運転免許を取得してしまった。これは僕の人生を狂わせるものだ。車の免許などとりたくもなかったしとれるとも思っていなかった。車に踏みつけられている都市に加担してしまうのか。なんて悪い奴なんだ。(運転は意外と面白)

◎ふとTVをつけるとトウナイトという番組に鈴木昭男が特集のように紹介されていた。自宅近くの商店街の人たちに好かれていた戸川とか、途中から見たけど15分位やってた。都会に住むやさしい仙人のようななどと... 新聞の番組組さんを見ると「屋根の上の大芸術家」となっていた。おかしかった。

◎年末ベスト10追加説明

それら送られてきたものをコピーしてNO.9(1月号)とします。他に原稿を送ってくることも勿論可。できれば11がキチ大。



山伏
山伏

山伏の修行
山伏の修行
山伏の修行
山伏の修行
山伏の修行
山伏の修行
山伏の修行
山伏の修行
山伏の修行
山伏の修行

食入事は死体保存法の一つ
死体は生者の血と肉とをとり除か
下葬し、起死、木林不良

山人
(天孫民族)
vs
平地人
(天孫民族)
「山の祭祀と
芸能」

「命の遺体」
「死は、死は、人」
「日本人の死生観」
「死は、死は、人」
「死は、死は、人」
「死は、死は、人」
「死は、死は、人」
「死は、死は、人」
「死は、死は、人」
「死は、死は、人」
「死は、死は、人」

吉野裕子
蛇信仰の視座

「山伏の修行」
「山伏の修行」
「山伏の修行」
「山伏の修行」
「山伏の修行」
「山伏の修行」
「山伏の修行」
「山伏の修行」
「山伏の修行」
「山伏の修行」

山伏 =
農耕以前の
狩猟時代の生活
修験道は仏教・陰陽道
が合わさったもの
日本の原始宗教の
山伏の信仰対象は山神
大名将軍や大名の邸宅には
修験道は作爲
「修験道入門」
五来重

死
生
擬死

藤本博昭

私の親は二度死に、義理の親は一度、いとも一度死んだ、という
知られざる夢の中で受け取ったのは、皆がかわるがわる私の夢に
あらわれ別れを告げるということは、つまりは私が、私一人が
皆と別れてゆくのではないか、という漠たる腹五らを私の夢見に
対して覚えていた頃、新聞の片隅に私の見知らぬ乙部某と
いう若い女性の死と記事が小さく載っていた。

11月20日、風の旅団の打ち上げによせてもらった。11月21日夜
あけにみた風の旅団の打ち上げの夢を語ってゆきたく思う。
実際の宴の途中、爆音がしついで窓を開けてみるとそれは路上
で車同士のトウケルたつたのが、夢の中では「爆音と共に室内に
煙が充満し、誰かが火事だ」と叫ぶ。炎がらつくと、火事場の恐
怖と魁惑と野次馬の怒号あるいはイタリアのサッカー場一帯では
人々は手に手にたいまつのような花火を持ち会場は煙と花火と
和唱する歌声のなほと化している—あるいはデモ、燃え上がる
火焔の沸き起るシブシブと乱打される角材…むしろ
そんな“現実”に近い“演劇”ではないかと思う。風の旅団は、
火を一種の切り札として使うことに対する疑問と誰かが書いてたが、
確かに“演劇”のそばでからみればそれは唐突で巧妙な手段と
いえるかもしれないが、いまだとて、燃えながらたりおろす水を天
幕を焦がさんばかりに炎立つポールを、そのあたりにすることがどう、
火すらも管理され、カスレンジからお行儀のよい丸顔で出てくるか
ライクのような小さな牢獄に閉じ込められているか、このころに於て。
「あわてて階下におり広場に避難する」ところは岡本公三が壇上に
立ち演説している。旅団のメンバーでテロリストびた人が彼に異議を
申し立て二人の争いとなる。二人は巨大な岩石を投げ合う。その過激に
見ている者はハラハラするけど当人達は笑顔でかつ本気で対決してる
(これはゴジラvsウラカヤマのシーンのイメージ) その異議申し立てが、

「反権力」という名の「権力」に対するものだからどうかはわからない。
例えば加藤泰が「炎のごとく」で「主義主張に生きる者」に
対する批判をフェミニスト的立場からおこなっているにもかかわらず、女
を縛りあげたり水責めにして拷問するシーンに監督自身の嗜虐性が
かま見えてしまう矛盾あるいはデュエルの「忘れられた人々」で主人公の
少年が母親が鶏を虐待するのをみて歎き悲しむ、けれど後日、
鶏をかばった自分自身が、うぶなばらしのために思わず鶏を叩き
殺してしまう、といった、監督が意図的にみせる矛盾、こういった矛盾の
破綻、イロニー、といったものが私は好きなので、原発に苦しみられ
ながらも「原子炉の前でひねり泣き号泣したい、おれはやり犯されたい
気分も、あわせて矛盾や生魚を噛み荒らし地面にしたらせるシーンの
あと、「ゲージツのために大事な晩のオカズを」と魚のためにちゃんと
オシマエをつけるまぜかえとか、劇中劇で「おれは先居をセリにまんと
ちやう」と言ったり、それに続くラゲジンのセリでのしりけたいい回し—
それは巻に記述する契合の中のTVドラマ中の歌謡曲の中の
レインに対するオチヨクリともいえるし、つまりこのようなことを
パロディ化するダイナミズムといえるとしたら、それを最も如実に
あらわれているのが、桜井氏の“演技”であり、最後のシブ・すたのお
を気とりアマトリフネを揺り鳴らしながら天降りきたるヒローの
美しさから一転してお尻に注射されるライク病みになり“下がり”、
水の路地の親方からあ、という間に中学生に襲撃され蹴殺
される浮浪者になり変わる、その落差をらくらくこなしてしまう
したたかさか、「笑顔での過激な岩石投げ対決」ということの前
私にとっては、シリアスな政治的テーマと地ロヤシレが無理なく
噛み合わされていて(少なくとも今回は、去年の「パールガン・パール」
ではちよと浮いた感じがなまにしもあらず。)というより、雑然と
したところ、いろいろの要素がぶちまかれた臭い立つゴッパ煮のカオ

スこそがこの芝居のエネルギーの源となっていて、そのドロ臭さがたまらなく
「いやだ」という者にとってはたまらなく「いやだ」というだろう。

「その岩石投げの争いはいつのまにか発光するツルギによる
戦いに変わって、誰かの大きなお墓に場所を移して。」
夢の中のイメージのメタリクセ、その偶発性・即興性を、
この芝居のなりたちを感じる事ができる。役者個人々が、
自主権古という形で自己表現しそれが次第に変容して、
あるいは横井氏が午を加えて今の台本ができておらんということだが、
九月公演の初日〜法政のラジ日と計五回見る、そのたびごとに、
内容が変わっていた。それは自分がどこから観ているかによっても随分
と違ふのだ、私の場合、他人の人とにじり寄りする形で最後の日には
最前列までたどりついたので、泥水をはかかれ犬に足蹴
にされるがらも三列目に座っている時とは全く違うそのダイク外さに
驚いた。たぶんもうこの芝居が終わってしまうもう二度と体験すること
ができないということが時々気になってはいて、というのわりこみようが
我ながら取っかきいけれど、何回も見るにたえるということが、深読み
謎と謎の楽しみ方ができるということが、霜田氏のいう「通女み」の
世界ということなのか〜とにかく私は霜田氏や藤本氏のように
曲馬館時代を知らない、「パルクザンパル」からしか知らないから、
うづろ見方しかできないのかもしれない。それから、政治にもうと
かかん、たかが芝居をツグすために機軸隊が大挙して
押し寄せてくる、そこにいてはいる現状が信じがたおたの
だけれど、今は天皇一賤民からみたこの世界の読みとり方に
興味がある、それは自分が人の死において糧を得る立場になる
であろうとそこからまた興味の持ちようであるけど。

先月の15日から毎週火曜の夜に12月のほしあがり9日にまたドイツの映画を見る機会を得た。(この文は過去形なのか未来形なのか現在形なのか Tenceがない) 去年のドイツ祭で東京で上映された150本の中から岩太のドイツ語講師の人(ドイツ人)とか加えて人好きのたろろです。一番古なのが59年の "Die Bruecke" で、これは新しいのか、79年の "Bildnis einer Trinkerin" というやつです。私はドイツ映画には(ドイツ映画には)詳しくはない、知っている人はファスティングくらいでしたが、前2別の企画で、やはりドイツ映画をつまみ見たことあり、ヘルツォークとかウヰンターとかは見ました。(「フッツカウリ」)と「事の次第」です。「フッツカウリ」はドイツの天本英世、クラウスキューが好きなで見たけれど、土人が土人土人にあまよふもろくろかた。「事の次第」は鼻にかけた、「ハリキキ」は見ません) せよ、三人ではのびしくレビューや感想を述べますのでよろしく。

① Die Bruecke 「橋」(1959)【ベルンハルト・ウツキ】

ストーリーは第二次大戦のドイツ敗戦約1ヶ月前で、小さな村の少年達が召集をうけ、その晩のうちに前線へ送られようとするが、殺に立たせられるというところで、彼等の村の端にある橋を守らせられる。しかしすぐに米軍がその村を進攻してきたため、彼等はいやおうなく最前線に立つ破目に陥る。2人を残して数人の友人達を失うが、奇跡的にも米軍の部隊と戦車と徹退させることに成功する。しかし後方に居た古兵達にとってはこの橋は戦術上、爆破すべきもので、少年兵達の努力は全く逆の効果を上げたといえるものだった。その事を生かすの2人に問いかけると彼等は古兵たちを殺してしまふ。しかし少年も一人はたづいには一人の少年が全ての装備をかき取り、ついでに「家へ帰ろう」とつぶやきながら橋をまたいでくる。…… というので、少年達それぞれの家庭環境のちがいやる木におこるおこる性格の差、行動様式のちがいをうたうのがいい、とよくおもしろい。ストーリーの展開や画面のつとまはいい、異和感はない。というはこの後見た2-3本の映画はその意味では異和感を感じ「寧ろ古典的。」で、「あーこれかドイツ映画。」と思いついた。だからです。

② 「四季を売る男」(71)【R. W. ファスティング】

見る前の解説によるとファスティングは「父の時代」(FATHERS)政権期の権者として、この話で、ちよろ日本での文は「岩戸集気、朝鮮戦争の末に日本に返すから、ちよろとを批判的に見ているというらしい。

まあ、わかるとうり気がする。でストーリーは外人部隊に行つた男が帰ってくるが、不祥事があつて警官の職を失ふ。果物の行商をやつたにゐる。彼には妻と子供と人妻の愛人がゐる。自らの生活感の行き詰まりからか妻にあたりちりし、自らも心筋硬塞で一度たふれる。妻の浮気相手の男を知ると雇ひいれた。年が友の助けで生活は持ち直す。商売が軌道にのつてきた。うつ状態かひどく。7月には友人たちの見守る中、医者にとめられている酒をのたがひ飲み、発作で死ぬ。妻は夫の戦友と結婚するが、それは愛情からのものというよりは子供と商売のことを考えた上でのことであつた。... 子供の目というのか。まあ、フジスター自身の視線であるのかもしれない。従つて心理描写、台詞も表現もかなり抑制されたものを感ずるが、それはアメリカ型エンタテインメント映画の手段に採られた。在米のトクサチのかもしれない。主人公の妻で何かよくわからぬが知的で仕事をしているアンナという女性の存在が気に入る。彼女は主人公を唯一理解している存在なのだが、決して彼の生活に立ちまゐることはない。何か彼は大きな欠落感があり、その穴をどうしようも埋められないまゝにしている... といふ(使い古された表現が好きな私は)風です。

③ 「本題に入ろう」(1967) [マイ・シユピルス]

女流監督です。話は1日、まじり、エッセンスの垂流。台詞、ストーリー、演技、シーンやカット、全て似てゐる。面白いといふ面白いのわけと、どこか惹きつけたいのでと、どきどきする。ドイツにもこんな映画があつた、たんなる、という感じが残るだけ。

④ 「お母さん元気ですか」(1972) [クリスティン・ツイーター] ^{の多用}

③とはうてか、対照的作品。静止画面や、テイク、事態の進行を各章別のタイトルとして文字で示してつづらぬ。ドキュメンタリー・カルポルタージェの感じをいける、役者もすべて現実感のある人達で、台詞などもフツキラトである。話は、ベルリンのある工場で1人の男労働者の行動を中心に労使の紛争があつて、こりかけるが、工場側のかげむきで敗れ、事態はますます苦しく、いく拍を撮っている。今回のシリーズの今までの4本の中での1本、これも重要な映画という気がする。ちんか見た後で「まあ、これから討論会です。今の主人公のあり方をあなたの立場から意見をのべて下さい」といふと、おれがされるんじやないか、と思つてしまう。実際、~~この~~ 話には説明をみた人物も出てくる。(マルクスの価値学説と親明におうとしてケルカにゐるシーンもある)。学習映画という感じはつよいけれど、木以上にあつたのはベルリンという街はドイツと別物なのか、という認識。ベルリン子はドイツ本土からきた人間を排斥しようとしている。今までの見たことのないドイツの映画というわけ、強く印象にのこる。

⑤ とあるはずの映画「不安と魂」は見れなかった。その日は竹田賢一さんと田沢湖に案内して。Yロコンナトをしても、たので。「案内」はいいけど、普通車を運転している者の悲しさで、道をまちがえたり、進入禁止だったり、時間規制下だったり。(盛岡市は特にひどいという事だぞ) ラッシュにぶつかって。盛岡市から出るまで40分もかかるというはあかしの目にあわせてきた。竹田さん、笠木君ごめん。後で、この日の映画の事を友だちにきいたら、何気ないショットにも気の配りがあり、ストーリーも何気ないから、実に見えるキの所があったとのことだ。なんでも、一人暮らしをしている中年女性か、季節労働者のような流木ものの男とできてしまい、一緒にいるが男は安穏な生活にストレスを覚え、胃をこわしてしまい、ついには出ていってしまう。女は1人になされる。とかいうキのらしい。ストーリーもつけまてきたかにはうかがえる。

⑥ 「アム中女の肖像」(199) [ウリリーケ・ホッティンガー]

これが一番最近の映画ですね。出だしの部分については「去年のエンハートで思い出させる。ある女が(妙に現実感の強いモデルのような)「過去を全て捨てて、酒を飲みつづけることだけ」を目的としてベルリンにやってくる」ところから始まる。アム中女は、ポスト(?)をめぐりながらそこにスタッフやキャストが書いてある、という実に古典的なもので「舞踏会の手帳」を思い出した。とにかく、映画全体に作り物めいたフレイクをこわてきかこわてきかと、この女流監督は出してくる。コメディ(スラップスティック)めいた脇役たち、空港、ホテル、酒場、カジノ、街路、といふ場所も口ケーションでありながら全て架空の場所の様。大体にして、主役の女がつかついに一言も声を発しないおりにあか(彼女は登場するたびにこわてき奇妙な衣装であられる)。登場人物たちの性格付けも完全に本能的である。常識と規律を象徴的に狂言めいた如くあらわれる3人の女性観光客、3人とも「アム中」を社会問題としてしか語らず、口調はTVの討論会か新聞の論評だ。主人公のつかあとなるアム中の女浮浪者、幻のよう登場する小人、そして何とニナハーグおとこの口をひろうてくれたのはサセアスカ? ついに監督自身が登場して「アム中」の内面的存在意識めいたキを、手記の朗読のまじりにてまかせてきた。とにかくタイトルだけみると「社会派」という感じになるけれど、それは全く正統派の性格を帯びた映画で、ま、いれゆる「実験的」意識が濃厚。いづるな作品の影響を受けつつベルリンという「作り物めいた都市の意識の次文化物の独自の存在感はあるのだった。ちよと鼻にだけてネ。

P4.

⑦ 「フィルムの青春」 ('65~'66) [フォルカー・シュレンドルフ]

この監督は天才である。「ブリキの太鼓」の人である。奇しくも、出たのが「ブリキの...」と邦人と同じようなシーンから始まるこの映画は、なんとモディ-ヴィニュー-シネマの火付けやきと云ふんがそうして期待したんで。ところが... 必かりしたという訳じゃあない。中味はハルセン・ハンセの世界でした。ギムフウィムにかけるあるナイヴな学生が、友人達の見せるいわゆる「悪の性」みたいなものを通じて自己の意識~精神を形成しはじめるといふ、ま、よくある話で、氣に落ちたのは、音楽にハンツェの名があったのだけ。これはあの有名な指揮者で作曲家のハンツェなのかあるあ? そう思、たまくとるかるか良からん下りや。

お見えている。

あて、2本の二つである。でも、まあ、こんなクレータウしたかはあまり読んた人もしあがるかもしあがるし、どちらかという個人物的な忘備録のような下からね、そーゆー話で。

もし、記述の中味にまちがいがあれば指摘してくたさるとありがたやうな。私とてはもとエグイなを聞ける。

⑧ P. E. がモタモタしている間に
すばやく P. S. E. が送られてきたので宣伝紹介。

- side A
- ①アミン: ジョセフ・ラサールのうた 3曲 / ジョセフ・ラサール
コメント: 「ずいぶん前の克也さんの番組でやって、すごく気に入って」
 - ②倉本高弘: 「チャイム」 / 倉本高弘
コメント: 「TRIAL RUN TAPESの大塚くんからオムニバスの誘いがあったので最初と最後の部分をP. S. E用に中間をTRIAL RUN TAPES用という事にしました。」
 - ③大野由美子+今井 隆: 「我俣(WAGAMAMA)」 / Danse du léou
 - ④藤本和男: (1)「ハレハレゴーゴー〜テープ・シック」 / 藤本和男
(2)「LOSING MY LUNCH OVER YOU」 / THE LUCBS BROTHERS
コメント: 「(1)は聞いたようなリフだなとは思いましたが、気にしないで作りました。実は、このテのどうでもいいような陳腐な曲も好きなね。(2)は①を聞いてなぜか思い出したお気に入りの歌。西海岸の連中らしいけど、よう分からん。」
- side B
- ①(匿名): (無題) / ?
(注: 「ふせた方が面白いでしょ」ってことなんで……。でもヒントを言うと、'85. 10. 20のライブからの抜粋です。)
 - ②福本健修: 「可? 不可? 家父の心配」 / 福本健修
 - ③乙部聖子: 「王国とジブシー」より / 風の旅団
 - ④河合 渉: (無題) / うてな ('85. 11. 4、武蔵野美術大学)
(注: うてなのメンバー = vo.g 河合 渉, b 岩間 栄, ds 河合宏明)